Zeroから始めるネット犯罪者更正計画

ｱｶﾙｲﾐﾗｲﾔｰ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

Ｑ．なんか身内が数回ほど世界存亡の危機に陥れようとしているみたいなのですが、どうすればいいですか？

目　次

祈り ―――――――――――――――――――― 1
ゼロへと至る ―――――――――――――――――― 11
タスケル ―――――――――――――――――――― 23

祈り

「時折、思うことがある」

キーボードを叩く音が止む。軽快なリズムが途切れた途端、無機質なモーターの機械音がやけに大きく聞こえた。

地面には根のように散乱したケーブル。壁面には林のように乱立するサーバー。窓は少なく、今が朝か夜かすら、彼らの研究所だった。

独房のような部屋でも、それが彼らの研究所だった。

そんな折、黒髭をたくわえた男のひとりがポツリと呟いた。

「こうして、ネットが普及しようとしている世界が実現できたのであれば、ロボットが普及する世界もあったのではないかと」

髭の男は薄々感づいていた。己の居場所が狭まって来ていることに。

元より彼の専門はロボット開発だ。電子工学に通じるものがあるからこそ、こうしてもう一人の科学者とともに、ネットワークの共同研究を行っている。

それは世の中が必要としているから。裏を返せば、世の中は彼が理想とするものは必要としていないと言うことを意味していた。

そんな独白に、ふくよかな茶髪の男は言葉を失う。

同じ科学者で、なおかつ途中まで志を同じくしていたからこそ、残酷なまでにその無念を理解できてしまった。

「……今からでも、遅くないんじゃないか？」

ふくよかな男が、どうにか絞り出せた言葉がそれだった。

……自分が方向を転換せずにいたら、本当にロボットと共存する世界が実現したのかもしれない。

そんな思惑が男にもあったが故の返答だった。

「よせ。もう世界はネットにしか関心がないのはわかっている」

髭の男も理解して、諦観の表情を浮かべた。

今となってはｉｆ（もしも）の話。

ここでいくら話しても詮なきことだ。

無駄話はここまでにして、作業に戻ろう――――そう言葉を続けようとした時だった。

「――――――よしっ」

突然、ふくよかな男が立ち上がった。

机が揺れる音がした後、今度は打ち合わせ用のデスクに腰掛けた。

乱雑においてあった書類やゴミなどを押しのけ、机いっぱいに広げたのは――――ただの真っ白な模造紙であった。

「決めた。私もロボットを作ろう」

「馬鹿かお前は」

髭の男は呆れた。

体力と納期……双方を鑑みてもスケジュール的には余裕があるわけでもない。にもかかわらず、この男はそんな〝必要ない（ムダな）お遊び（ごと）〟をやろうと言い出したのだ。

「こう言った息抜きもいいだろう。実物はともかく、ちょうどおあつらえ向きに仮想空間があるんだ。ちょっとくらい設計図を歩かせてもバチは当たらないさ」

へらへらと笑うその姿に髭の男からため息が溢れた。

……この男の発想と技術力は大したものだと認めているが、こう言った子供っぽいところには付き合いきれない。

髭の男は内心呆れながら、無視して己の作業に戻ることにした。

「ふむ、完成図のイメージは……あとは製図して、パーツのデザインを詰めていけば……」

お構いなしに模造紙に定規を当てて、線を引いていく。手捌きからして素人ではないにしても、髭の男から見れば拙い域を出ない。

「……そんな組み立て方じゃ何年もかかるだろうに。こういうのはだな……」

結局、髭の男は黙っていられずに椅子から立ちあがった。実のところ、近くで己の得意分野の話をされていると、うずうずしてしまう質の人間であったわけだ。

初めは部品の知識や工程の組み方の話をしていた。ふくよかな男も、そういった〝ものづくり〟のノウハウは持っていたためか、すぐに吸収していく。

やがて、当のロボットの仕様の話になると……

「やはりバスターだろう。砲撃は派手であればなおのことといい」

「いや、ビームソードだ。肉弾戦こそが華だろうに」

意見が割れ……

「そうだ。後付で強化できるパーツがあれば……」

「ワシだったら変形機能をつけるな。可変はロマンだろう」

「そうだな！　さすがは■■■■だ！　では、いっそ動物をモチーフにするのはどうだ？　犬やライオン……恐竜とかもいいな！」

「ほう、いいセンスだぞ■！　では、駆動部にいくつか工夫をしなくては！」

己の趣味に走っていき、本来の研究からみるみる逸れていく。
後日、二人は上司からこっぴどく叱られることになるのだが、この〝遊び〟は休憩時間を使っても続けられていった。
やがて『どちらが最強のロボットを作れるのか』なんて本当に子供じみた、飛躍した論争まで行き着いてしまうほどに。

……世の中から見れば、それは無駄で無意味な時間だったかもしれない。
けれど、これだけは言える。
後に道を分かつことになる二人の男にとって、色褪せない思い出（メモリー）となったことは確かだ。

◆◆◆

――これは一体、誰の夢なのだろうか。
なんて他人事のように夢を切り捨てた。

「ふぅ……」

僅かな明かりが灯る部屋。
やや、うたたねしかけていた少女は、ため息とともに、今の世界について思いを馳せる。
ネットの発達に伴い、世の中の子どもたちは外で遊ばなくなった、と世間の大人たちから嘆かれたのも今や昔。
時は２０ＸＸ年。ネットワークは急速に発達し、今やライフラインと同義とされるほどに人々の生活に密着した存在になっていた。大人子ども関係なく、ＰＥＴ（ペット）と呼ばれる携帯情報端末を持ち、自由に専

門的な知識を持たずして、数々のネットワーク技術の恩恵を受けられるようになっていた。
この薄暗い部屋の主である少女もまたその一人だ。電子モニターの無機質な光源を目の前に、かけていた眼鏡をデスクに置いて背伸びをする。若さゆえ凝り固まった関節が鳴ることはないが、代わりに疲労が込められた吐息が漏れる。
程よく集中力が切れてきた頃、少女は傍らにあった旧時代的な瓶を手に取って呷る。中身から水滴しか垂れて来ず、飲み切ったことすら忘れてしまっていたらしい。
今回の作業で何度目かわからないラストスパートのために眠気覚ましが欲しかったが、無いなら無いで仕方ない。早々に見切りをつけた少女は再び眼鏡に手を取ろうとした。
コンコン、と背後から扉を叩く音が耳に入った。少女が返事をする間もなく、普遍的なデザインとなった木製の扉が開く。

「入るぞ」
「あ、バレルおじさん。こんばんは」

入ってきたのは無精髭を生やした筋肉質の男であった。このバレルと呼ばれたその男こそ、少女の親……代わりの存在であった。
少女は何てことなく挨拶したものの、暗がりから見えるバレルの表情は固いままだ。
そのまま、彼は手元のスイッチを押す。
壁面の窓の特殊ガラスから、外の風景が一気に映し出される。

「もう朝だが」
「……え」

窓から差し込む温かな陽。
疑いの余地なしに、朝の陽の光を浴び、今度は少女の表情が固くなる。

「……その年から夜更かしは感心しないと何度も言ってるだろう。今日で何日目だ？」
「……まだ、二日目、かな？」

バレルが呆れるのも無理はない。
少女の年は未だ１０歳も満たない。成長の大敵たる徹夜を、こともあろうか二日連続で続けている。少女自身も〝非常識なこと〟という認識があるのか、バレルの方を向いて申し訳なさそうに視線を落とす。

「ご、ごめんなさい……どうしてもやっておきたいことがあったから……」
「全く、今度は何をしている？」
「えっと……ナビのプログラム、組んでた……」

ナビ、とは疑似人格プログラムのことを指す。専門知識がなくてもネットの恩恵を真に授受できるのは、このナビがＰＥＴのインストールされてこそ、と言われるほどに人々の生活を支えている存在だ。
そんな高度なプログラムを、生まれてから１０年も満たない少女が一から作ろうとしている、と言うこと自体、世界単位で見ても驚異的なことである。

「血は争えない、ということか」

ただし、バレルの表情からは憂う気持ちが露わになっていた。しかし、それも一瞬。すぐに真顔へと戻る。

「別に止めるつもりはない。だが、それはそれとして規則正しい生活をしろ。もし今度同じことをしたら、カーネルに監視させる」
「はい、気をつけます……」

少女はその変化をあえて無視し、叱責を甘んじて受け止めた。育ての親として、彼なりに使命を果たそうとしてくれていることを理解しているからだ。

「……朝食は？」
「た、食べます。着替えてから行くので……えっと」
「わかった。下で待ってる」

そう言い残し、バレルは部屋を去る。
いつもなら作ってすぐに外出するはずだが、今日は一緒に朝を過ごせるらしい。少女としては喜ばしいことなのだが、つい先ほどまで張り詰めていた空気にいた反動か、再び椅子に身を預けてしまう。

「ふぅ……」
『……怒られちゃったね』
「アイリス、どうして声かけてくれなかったの？」

モニターの隅にひっそりと映る少女――――アイリスにじとっとした視線が送られる。
見た目からして同い年に見える二人だが、アイリスはネットナビである。
生い立ちがかなり特殊なため、残念ながら少女のナビではないし、少女としてもそちらの方が良いとも思っている。

『こ、声はかけたけど……すごい集中していたから……』
「う……反省しなきゃ、だね」

それでも、二人の関係は友人に近いものであった。引っ込み思案のアイリスであるが、おずおずとしながらも非を口にする。
アイリスがあまり嘘をつけないことから察するに、声をかけてくれ

たことに間違いない。徹夜による判断能力の低下は著しいことを学んだ少女であった。
気を取り直し、身支度をする。
メットール柄のパジャマを脱ぎ、着慣れたブラウスとスカートに着替え、その上に白衣を羽織る。背中まで伸びた金色の髪を梳いて、ひとつに束ねる。同じ年頃の女の子に比べたら粗末なものかもしれないが、それだけで充分だった。

「それじゃあ、アイリス。わたしが戻ってくるまで隠れててね」
『あ、あの……』

バレルの後を追おうと、ＰＣをロックしようとした時、ふと、アイリスが呼び止めた。

『えっと、前々から気になっていたんだけど、そこまで熱心に取り組んでいるものって、何なの？』

奇妙なことを聞いていると思われるかもしれないが、前述のとおり、アイリスはナビではあるが、少女専用のナビではない。
こうしてＰＣに現れているが、アイリスから何の作業をしているかはわからないように細工が施されていた。無論、その気になれば簡単に見れてしまうが、興味本位でそんなことをするナビではない。現に、こうして直接聞いてきたのだろう。
……もっとも、少女としてはアイリスには特段隠すつもりはなかったようだが。

「おじさんにも言ったとおり、ナビを作ってるんだ。アイリスを守ってくれるナビをね」
『わ、わたしを……？』

意外な答えに、アイリスは驚愕する。

見れば、少女の顔は先ほどまでの穏やか表情から真剣なものへと変わっていた。

「……今はわたしが匿っているけど、何年か経ったら限界は来るはず。そうしたら、おじいちゃんはアイリスを見つけて、利用しようとする。もしかしたら、お父さんもアイリスの存在を知ったら、何かするかもしれない」

予感ではなく、確信から来ている言葉だと、アイリスには感じる。特に前者からは、まるでそうなったことを知っているかのような口ぶりのように聞こえた。

「だから、おじいちゃんたちからの刺客からアイリスを守るための――それこそ、カーネルにだって負けないナビを作らないと」

『でも、貴女はワイリーの……』

「違うの、アイリス。家族だからこそ、間違っていることは間違っている、って言わなきゃ。おじいちゃんも、お父さんも同じだから」

瞳には、真っ直ぐとした信念が込められている。

アイリスは、その姿に彼女の育ての親と、己の兄の姿を重ねてしまった。

じゃあね、と言う言葉とともに、ＰＣにロックがかかり、アイリスからは少女の姿が見えなくなる。

一人になったアイリスは、少女の言葉を反芻する。

……純粋に嬉しかった。

不器用なバレルの教育は、間違いなく少女の中で生きていること。少女自身、余裕なんてないはずなのに自分の身を案じてくれること。

――それに、道を踏み外してしまう機会はいくらでもあったのに、ここまで真っ直ぐに育ってくれたことに。

『貴女が、どうしてそこまで知っているのかはわからない……けど、迷

惑かけてごめんね、シエル』

犯罪組織〝ＷＷＷ〟のリーダーとして名高いＤｒ．ワイリーの孫娘（かぞく）である少女――Ｄｒ．シエルの道に光あらんことを。

両手を重ね、祈るアイリス。

そこにはネットナビではなく、間違いなく一人の女の子がいた。

ゼロへと至る

微睡むように、電子の海を漂うモノがあった。
ソレに形はない……否、あったが、既に原型をとどめられないほどに事切れていた。
ソレは元より電脳世界に害をなす存在。
本来なら本能のまま世界を荒し、やがて駆逐されるはずの運命を持ったモノのはずであった――――人間たちの言う、心（ココロ）を持たなければ。
心を持ったことにより、人間たちの営みに興味を持ってしまった。製作者の意に反して、世界をもっと知りたいと思ってしまった。文字通り、いるだけで病原菌を撒き散らす存在なのに、ソレ――――ゼロウィルスはそんな夢を抱いてしまった。
そんな夢でしかない夢を、叶えてくれた者がいた。
彼らはゼロに絆や信頼、友情の力を示し、境遇を理解し、〝在るだけで害を成す〟その生来からの性質すら捻じ曲げてくれた。
共に製作者へのケジメをつけた後、世界を見て回りたいという望みも、彼らは背中を押してくれた。あまつさえ、ウィルスの身であるゼロを友と呼び、再会を誓ってくれた。
当時、ゼロが抱いた感情を〝奇妙〟と称したが、こうして消滅間際になって見れば、〝歓喜〟という感情だったとわかる。至って単純明快な答えだったというのに、それすらわからないほどに無知だったことを自覚され、改めて己の出自を自嘲した。
世界を見て回り、学び、糧にした。
喜びを見た。
悲しみを見た。
怒りを見た。
嘆きを見た。
楽しみを見た。
――――そういった世界の営みを見た。
心を会得し、学んだ今なら、これが美しいものをであったと断言で

きる。
ああ、旅の執着点としては悪くない。
……心残りがあるとするなら、ひとつ、遂ぞわからなかったことがあった。
それは、自身の生まれた意味。
製作者(教授)の意図ではない。ゼロの製作者と、設計者は異なる。設計者は何度も世界を危機に陥れた者と聞いているが、果たして何を思ってゼロを設計したのだろうか。本当に、製作者は設計者の意図を全て理解していたのだろうか。
もっとも、今では確かめようのないことであるが。
……ゼロの意識が薄れてくる。
望んだ形ではない生であったが、悪くない生であったと感じていた。あとは、この電子の波に身を委ねれば無に還るだけ。

「なるほど……これが、〝助ける〟という感情か」

走馬灯というものか、かつての出来事が思い起こされる。
友を庇い、新たに作られたゼロ(自分)に反撃す――――――違う。

「さらばだ。ロックマン、ガッツマン。……仲間と呼んでくれて、ありがとう」

新たなゼロとともに、製作者を巻き込んで自爆す――――――違う。

ゼロは気づいた。
これはオレは知らない。オレではないオレが至った結末だ、と。
どうやら、存在が曖昧になっているせいか、時間すらあやふやな世界を漂っていたようだ、と。

そして、別の可能性のひとつとしてある、同一にして異なる存在が混ざり合っているのだ、と。
生まれた時間軸、構成しているモノは異なるが、同一の存在。他のデータよりも馴染みやすいからこそ、意志とは関係なく本能的に同化しようとしているのだろう。まるで微生物や細菌のようだが、本当に似たようなモノなのだから質が悪い。

――今度は、ナビとして生まれておいで。

ふと、そんな声が聞こえた。
もうひとつの己から流れてくる微かな記録に、ゼロは無いはずの口元を緩める。
――オレには未練はない。
――だが、このオレはまだ知らないことが多い。もっと、世界を見るべきだ。
ゼロは、己の知る友ではなくても、その願いを聞き入れるのも吝かではなかった。
無論、消えかけのゼロにできることなぞ、同化して延命してやることくらいか。とはいえ、精神は〝どちらのゼロでもないゼロ〟になる可能性のほうが高いし、結局のところ、空気中に舞う塵が埃になることで、目に見えないモノが目に見えるようになるくらいの措置に過ぎない。
もし、これで生き延びられなかったら、そうなる運命だっただけ。
仮に、死にかけのウィルスを助ける奇特なヤツがいれば、そいつが治してもらえるかもしれない。
メッセージカードが入った瓶を海に流し、それが宛先まで届くくらいの確率だろう。しかし、それでもいいと思った。それだけ、このゼロには可能性にかける感性を持ち合わせるほど、豊かな感情に目覚めていたのだ。
それに……このゼロが最期までわからなかったこと――己の生まれた理由を見つけてくれるのではないか。

そんな淡い期待を抱きながら、このゼロは、新しいゼロへと身を委ねた。

「――――――――」

その様子を、宙（ソラ）がじっと見ていた。

◆◆◆

カラン、と、フローリングから甲高い音が響き渡る。無残にも落下したスプーンが、ひとりぼっちのまま横たわっていた。

「……洗ってくる」

シエルは机を下りて小走りでキッチンに向かう。注意力が散漫になってきていることが明らかだった。

テーブルを挟んで食事に勤しんでいたバレルは、視線だけシエルの方に移したものの、特に何か注意することはなかった。

……会話というものは交わされない食卓。

険悪な雰囲気ではない。バレル自身、口数が多いわけではないし、シエルも特段おしゃべりな性格はしていない。これが二人にとっての普通だった。

ところが、今日は少しばかり違っていた。

「眠くないのか？」
「ううん、平気。目が冴えちゃったの」

はっきりとした口調で、平常運転であることを示す。育ち盛りの少女が二徹していては倒れてしまうだろうに、シエルにはもう慣れたものであった。

随分と、逞しく育ったものだ――――――この点においては、喜ばしくない方向に。

「なら、これは何だ」

――――――バレルが、その魔剤（エナジードリンク）の空き缶を取り出す。

……ゆっくりと、シエルは顔を背けて誤魔化す。まるで親にイタズラを看破されたときのような子どものように。

この場面だけを切り取れば、間違いなく彼女は年相応の女の子だっただろう。

「……その年でこれに頼るのはやめておけ」
「ご、ごめんなさい」
「いや、謝ってほしいわけではないのだが……」

今度はバレルの方が顔を背ける。

無論、反省し、なおかつ改善してほしいのは事実であるが……せっかく腰を落ち着かせて満足に会話できる時間をこんな空気にしたい気持ちはなかったからだ。

気がつけば、テーブルには空の皿ばかり。

……食卓に残ったのは沈黙だけだった。

「そう言えば、もうすぐ１０歳の誕生日だったな」

落ち着いた声で、話題を変えるバレル。

平静を装っているものの、この男――実は初めからシエルの誕生日プレゼントをさりげなく探ろうとしていた。
こうして直接切り出している時点で、既に苦渋の決断をしているのだ。

「そうだったっけ？」
「自分の誕生日すら覚えていないのか」

一方、当人は忘れかけていたわけだが。
咄嗟に「ごめ……」と、義父に謝りそうになるシエルだが、寸でで飲み込んだ。バレルが急に誕生日の話題を持ち込んできた意図をわかってしまったからだ。

「……」
「……」

再び、静かになる食卓。
何度も言及するが、この二人は仲は悪くない。ただ、互いが不器用なくせに察しがいいため、会話のペースが実に不安定なのだ。
追われる身のはずのアイリスが、わざわざ隠れて滞在している理由がよくわかることだろう。

「……何か欲しいものはないか？」
「欲しいもの……欲しいものね……」

直截的な問いかけに、シエルは思案する。
年頃の娘なのだから欲しいものなど山ほどあるだろう……と思っていたバレル。しかし、シエルの表情が平静と変わらず、むしろ頑張って〝欲しいもの〟を捻出しようとしている気がしているように見えていた。
数秒思案した後、シエルは漸く口を開いた。

「だったら、おじさんに休んで欲しいかな」
「俺……だと？」

ダメかな、と首を傾げるシエル。
この少女が望んだものは、育ての親にあたる者の〝時間〟であった。
頭から冷水をかけられた気分だった。
シエルは聡明だ。単純に頭脳のことだけではなく、精神面においてもそれは当てはまる。バレルはそう思っていた。
けれど、それ以前に彼女は、実の親たちから置いていかれたひとりの女の子であったのだ。

「……っ。すまない」

軍人という立場が、バレルを許してくれなかった。こうして朝を共にしていること自体、一ヶ月に一度あれば幸運なことだ。

「……気にしないで。軍人さんって忙しいのはわかってるから」

ごちそうさま、と席を立つ。
フォローのつもりなのか、シエルは振り返ってバレルへと笑顔を見せる。

「――――私はその気持ちだけで充分だから」

けれど、その言葉に見え隠れする諦観の想いが、バレルに深く突き刺さる。
シエルは、わかっていたのだろう。どうやってもバレルの都合はつかないこと。にもかかわず、あえて我儘を言ってしまった自身に嫌気を指しているのかもしれない。

「……ままならないものだな、カーネル」

ぼそりと、独白するバレル。

そこにいるのは、〝不死身〟と謳われた軍人ではない。ただ、義娘への接し方に苦悩するひとりの親であった。

そんな消えそうな声に相棒（カーネル）は何も応えない。応えられない。

彼には既にアイリス（優しさ）が抜き取られていたために。

◆◆◆

「あぁ～……やっちゃった……」

一方、義娘の方も打ちのめされていた。

目が冴えていても、寝不足で頭が働いていないことが顕著に現れた。ベッドに顔を埋めながら、随分と意地悪なお願いをしてしまったと猛省する。

できないとわかっていて、なぜあんなことを口走った？　まだ大人に甘えていい年齢だから？

関係ない。結果的に義父を困らせただけじゃないか。そんな考えがシエルの中で堂々巡りする。

まだ１０歳にも満たない少女でも、甘えたいときもある。しかし、相手の事情などを全て察して遠慮してしまう。アイリスには、〝難儀〟な性格と称されたことは数え切れない。

シエルはあの祖父と実父と同じく、電子工学、ロボット工学において素晴らしい能力を持っていた。幸か不幸か、Ｄｒ．ワイリーという、今のネットワーク社会の基礎を作り上げた真性（ホンモノ）の天才の能力は確実に遺伝していた。

その頭脳により、実年齢よりも大人びている性格に育ってしまっ

た。しかし、それ以外にも彼女の性格を構成する要素があった。

「それにしても、もう１０歳になるのね……早くしないと、ＷＷＷ（ワールドスリー）が本格的に動き出しちゃうわ……」

――――――Ｄｒ．シエルには、未来の知識がある。

きっかけはシエルも覚えていない。

朝起きた時に知ったのか、入浴中に知ったのか……物心がつく前に祖父や実父によって何かしら施されたのか、真相は確かめようがない。何の前触れもなく、宙（ソラ）から隕石が降ってくるように突然に、シエルの記憶に付け加えられたのだ。

未来予知、なんて大層なものでもない。

シエルが知り得ることなぞ、所詮は歴史の教科書に載っている年表のように、大雑把かつ淡々とした事実と結果程度のもの。なぜ、どうしてそうなった、という重要な部分まではわからない。

徹夜続きの疲れのせい、と切り捨てられれば良かった。しかし、その垣間見た未来にはバレルとカーネル、アイリスの存在が関わっていた。故に、彼女には不思議と〝間違いなく訪れる〟という確信を持たずにはいられなかったのだ。

……もっとも、一連の事件は何者かの活躍によって解決されることとなる。最終的に祖父も実父も改心し、社会に大きく貢献する存在となるそうだ。

結果良ければ全て良し。であれば、シエルは静観を決め込んでいれば――――――

「ダメよね」

――――なんてことは考えなかった。

その呟きの後、スイッチを切り替えるように表情が変わった。

休憩はおわり。寝不足なんて知らない。ここからは科学者の時間だ。

気を取り直したシエルは白衣の皺を直し、自室を後にする。
あの祖父と実父と違い、幸運にもシエルは正義感の強い子に育った。
そんな彼女が、己の身内が計五回も世界存亡の危機に陥れることを知っていて、指をくわえて待つなんて真似はできなかった。その渦中に身を投じる決意をしたからこそ、本来の研究を差し置いてまでナビ開発に心血を注いでいるわけだ。

「えっと、どこにあったかしら？」

そして、辿りついた場所が家の地下。
蛍光灯が部屋を照らし、ほこりかぶった紙媒体の本たちが棚の各所で列を成す。
在りさまは時代錯誤も甚だしいが、ここはかつて祖父が使っていた、私用の研究室であった。
シエルがここを見つけたのは数年前のこと。
当時、厳重にロックがかかっていたそれを、逆探知などのトラップに警戒しながら一週間ほど時間をかけて慎重に解錠したこの部屋。オフシャルも知らない、世紀の天才が残したそれは、世の科学者からしたら持ち腐れるとわかっていても〝宝〟そのものだろう。

「……あ、あった。疑似人格の数値パターン」

その宝の山から取り出したのは、ナビの疑似人格に関する文献。
シエルのナビ作成の作業は既に佳境へと入っていた。外郭は既に完成しており、残るはナビの〝心（ココロ）〟ともいえる部分について取り掛かるだけ。万全を期すために、（能力と実績だけは）偉大なる祖父の力を借りようと、ここに訪れていたわけだ。
パラパラと、ページを捲りながらざっと目を通す。
目当てのものと相違ないか確認するための作業だ。
以前、ブックカバーに騙されて部屋に持ち帰り、いざ捲った時に

テイラノサウルスの絵と化石の写真が出てきたこともあった。天才科学者の意外とズボラな面を垣間見たところで、シエルにはこの作業を行う癖を身に着けた。

「うん、間違いない……あれ？」

パタン、と本を閉じた時。

片手に奇妙な感触を覚えた。

埃を払いながら背表紙を取っていくと、本の裏側に何かが張り付いていた。見れば、それは今では見ることすら珍しくなったデータディスクと、ケースに挟まれている現像写真が忍ばされてあった。

「これ……おじいちゃんと、誰かしら？」

写真には、若い男が二人して肩を組んでいる。ワイリーの科学省時代の姿を知っていたシエルは片方は祖父だと理解した。その表情は、悪の組織の親玉には見えないほどに輝いた笑顔をしていた。

では、このディスクは写真データがあるのかと思いながら、何気ない様子でケースを開けてみた。

ディスクの表面には、何やら手書きでアルファベットが書かれている。

読めるが、聞きなれない単語だった。

なのに、どうしてだろう。

「――――――――Ｚｅｒｏ？」

その言葉を口にした時、シエルは胸に熱いものがこみ上げてくるよ

うな錯覚を覚えた。

タスケル

地下で見つけたディスクの解析には、あまり時間はかからなかった。

トラップのつもりなのか、いくつか対抗ウィルスが仕込まれていたようだが、シエルは呆気ないほどに短時間でハッキングして見せてしまった。

「……妙ね」

逆に、違和感を覚えるシエル。

例の研究室に入る時のハッキングに比べればお粗末もいいところだった。仮にも世紀の天才が所有していたものにしては些か拍子抜けすぎる。

二つ、シエルの頭に理由が思いつく。

ひとつは、見つけて欲しかったのか……否、ならば研究室を固く閉す必要はないし、あんな山ほどある本の中の一冊に忍ばせる意味はない。

「そういうこと……」

もう一つは、『知っても意味がないから』だ。その予感は、データの中身を見た瞬間に確信へと変わった。

ディスクの中には、何もなかったからだ。

正確に言えば、保存されているファイルが全て破損しており、開くことはできないのだ。なるほど、確かにこれなら誰かが見ても「せっかくセキュリティを突破したのに、これでは骨折り損だ」と落胆させられ、ディスクごと処分されることだろう。

シエルは自作のプログラムを起動させ、復元作業に取り掛かる。破損していようが、あの祖父が残したもの。（本来ならオフシャルなり科学省なりに引き渡すべき証拠なのだろうが）何かしら意味はあるは

ず……そんな期待を胸に復元されたデータの中身を確認していく。

ぽつぽつ、とデータが復元されていく。

破損データの正体は、ただの画像ファイルだった。

ところが、中身を見ていても何の画像かわからない。表示されるのは紙の断片の画像ばかり。

「う」

シエルは思わず眉をひそめてしまった。

紙切れの画像ばかり入っている理由がわかってしまったからだ。

一見、ただの紙切れのようだが、よく見てみると切れ目や模様から察するに、元々はひとつの紙だったものを粉々に破き、その後にデータ化されたものだとわかる。

つまり、画像ファイルひとつひとつがジグゾーパズルのピースだ。全てを決まった場所に当てはめることで、ようやく画像の全貌を確認することができるわけだ。

……何とも回りくどい上に原始的、そして性格の悪いセキュリティだろうか。これでファイルひとつひとつに数百桁のパスワードが設けられたりなどしていたら、さすがのシエルも途中で諦めたかもしれない。

「まあ、おじいちゃんらしいかもしれないわね」

くすり、と笑いが出てしまうシエル。微笑ましいものではなく、苦笑いの方だが。

ここにいるのはその性格の悪い男の血縁者。

……いや、性格は真反対だが、能力面では迫るものがある。

復元作業に並行して、キーボードに指を走らせる。数分も経たずに即席で組み上げたプログラムを起動する。

機能は至って単純。

ただ、画像を解析し、形状や文字など関連する部分を自動で判別、並び替えを行うだけのものだ。使用する機会は、おそらくこれが最初で最後。

『デハ、アトハワタシガヤリマスノデ、シエルサンハヤスンデイテクダサイ』

「うん、お願いね」

あとはプログラムくんが作業を終わらせるのを待つだけ。ひとまず手持ち無沙汰になったシエルは、白衣を脱いでベッドへと向かう。

バレルの前では大丈夫と言っていたが……限界が来ていたのだろう。大人しく仮眠を取ることにした。

仰向けに横たわり、見慣れた天井を見上げる。

……ふと、ディスクに書かれていた文字を思い出した。

〝Ｚｅｒｏ〟

あの文字に、どのような意味が込められているかはわからない。

祖父のテロ計画に関するヒントがあるかもしれないし、そうでもないかもしれない。

……ただ単に、祖父の考えていることを知りたいだけなのかもしれない、と、シエルは心中で自嘲した。

使命感と好奇心がせめぎ合う胸中。

それすらも些事と言わんばかりに、今まで誤魔化していた分の睡魔の波が、シエルの意識を攫っていった。

◆◆◆

アイリスはシエルのＰＣに拠点を構えているが、別に拘束されてい

るわけではない。
WWW（ワールドスリー）やウラインターネットに近づきさえしないで欲しい、という約束をしているが、外出は自由に行える。元よりシエルは、アイリスを縛り付けるつもりは毛頭ないのだ。
現在、アイリスが訪れているのはニホン国にある、〝よかよか〟と呼ばれる温泉村のエリアにいた。
理由は、あの親子のためである。
バレルとシエル――――二人の親子関係は悪くない。
バレルが不器用なせいで距離感を掴みかねていることや、シエルがアイリスのことを匿っていることを話していないこと、それも相まってシエルがバレルに遠慮がちになってしまっていることを除けば、良好と言っていいだろう。
しかし、あの二人は色々と多忙すぎる。
方やアメロッパ軍の元総司令官、方や日々研究に没頭する科学者。団欒の時間なぞ、朝に顔を合わせて朝食を共にできればマシくらいだ。
もうすぐ、シエルが１０歳の誕生日を迎える。ならば、それに合わせて家族旅行に行ってもバチは当たらないだろう。
そんな思惑を胸に、二人に合いそうな旅行先を探していた。候補のひとつとしてアイリスが思いついたのが……この温泉である。
日々の仕事や研究を忘れ、日頃の疲れを癒し、羽根を伸ばすには絶好の場所だ。
しかし、アイリスはナビだ。
ネットワークを通じてあらゆる場所へ行けても、詳細は数値的なデータを通してしか物事を測れない。だからこそ、実際の様子や効果を確かめるため、現地の電脳に訪れたわけだが――――
「えっ……？」
温泉の電脳――――何やら、他の電脳世界に比べてそこだけ異質だった。

地面には切り取られたように穴が空き、中からは赤いスライム状の物が飛び出している。
この電脳にはウィルスも現れることは知っていたが、あんなものは見たことがない。見れば、元々いたはずであろうウィルス【ガルーダ】たちが、次々とその赤いナニカに取り込まれ、ところどころノイズに覆われてしまっている。

「ウィルス……じゃない？」

新種のウィルスかと思ったが、すぐに違うと断定する。ウィルス同士が捕食し合うことは今まで見たことなかった。何より、あの赤いモノがいる場所がみるみると別のモノに作り変えられている様子から、そんな生易しい存在ではないことを目の当たりにしている。
バグか――――いや、バグにしても明らかに異様だ。ウィルスであろうと構わず捕食するバグなぞ、アイリスは知らない。
とにかく、この場からはやく立ち去るべきとアイリスのナビとしての本能が働く。
他のナビと違い、ＰＥＴを通じて電脳世界に入ったわけではないため、即座にプラグアウトすることができない。
ゆっくりと、ゆっくりと出口まで後退する。幸い、向こうはアイリスに気づいていない。このままこの電脳を脱することはできる――――はずだった。

「■■■■■■――――！」

一体のガルーダが、アイリスめがけてヒートショットを放とうとする。こんな状況でも関係なく、ナビを含む電脳世界を荒し回るからこそウィルスなのだろうか。
アイリスは最強のナビであるカーネルの片割れだ。
ただ、直接的な戦闘能力はカーネルの方に集中しており、彼女の能力は電子装置などの操作に特化している。その為、他のナビのような

標準装備は持っていない。
焦ることもなく、アイリスは髪飾りの一つに手を触れる。
すると、赤い盾が展開された。
もしもの時、護身用としてシエルが預かったプログラムであるリフレクト。攻撃を反射する性能をもった盾にヒートショットが衝突するだけで、ガルーダは呆気なくデリートされる。
この程度の窮地であれば、長年逃亡生活を続けていたアイリスにとって造作もないことだった。無駄のない、見事なバスティングに成功する。

――――――誘爆したヒートショットの行方に目をつぶれば。

「……」

ぬるり、と足元に火が灯った赤いスライムの一体が捕食を止め、アイリスの方へと向く。それにつられる形で、他のスライムもアイリスへ意識を向けられる。外見上、目はないはずなのに、睨まれているような錯覚と、ガルーダとは比べられない危機感がアイリスを襲う。
あれに取り込まれたらマズい。
傷がつくだけならまだいい。最悪、あのガルーダのように吸収されてしまえば、形すら残らないかもしれない。
先ほど使用したリフレクトを再展開する。
ほとんどの攻撃を反射する盾。並大抵のウィルスであれば、防ぐだけでダメージを与えるプログラム。しかし、それすら構わず赤いスライムは次々とアイリスに群がってくる。捕食本能に赴くままに。

「――――――っ」

もう片方の髪飾りに触れる。

シエルから託された保険はもう一つあった。それを使えば、この窮地から簡単に抜け出すことは可能だ。
……使うことができれば、の話だが。

「ダメ……間に合わないっ」

一瞬――――――ほんの一瞬だけ、時間が足りない。
赤いスライムは一目散にアイリスとの距離を縮めてくる。バスターやキャノンがあれば時間を稼ぐことができたのだろう。リフレクトという、受動的な攻撃手段しか持っていないことが仇になった。

――――――助けて。

誰が口にした言葉なのかわからない。
アイリスが思っていただけで、実際に発することができなかった言葉なのかもしれない。

「タス、ケル。助ける、か。わかった」

――――――そんな声なき声を、聞き届けた者がいた。

後に、温泉の職員が点検のために、この電脳にアクセスする。
スキャン実行。
ウイルスの痕跡……なし。

ナビのアクセス記録……なし。
感度……良好

――――本日も、異常なし。

◆◆◆

「ん……」

ゆっくりと瞼が上がる。
程よい倦怠感のある体と、霧が晴れたかのようにすっきりとした頭から、連続の徹夜の疲れは溜まってたことを自覚するシエル。
自分のことを他人事のように考えてしまっているあたり、これではバレルやアイリスに心配されるのも無理はない。

「ふわぁ……おはよう、アイリス……」

ほら、まさにアイリスが心配そうな声が――――

「……あれ？　アイリス？」

しない。
異変を感じ取り、ＰＣに呼びかける。画面にはアイリスの姿はなかった。
珍しく、今回の外出は遠出のようだ。
……シエルとしては不安ではあるが、アイリスだって長きにわたって祖父から逃げ続けている。いざという時のために保険を用意している。
保険といっても、大したものではない。

一度だけ強制的にプラグアウトしてシエルのもとに戻ってくることができるという単純なプログラムだ。
一応、野良ナビとして扱われているアイリスが、他のナビのようにプラグアウトできるようにするための単純なものでしかない――――たとえ檻に入れられても、ウラの奥の奥にいようとも、遠い宇宙にいようとも、シエルが想定し得る範囲でいかなる事態において、阻害されることのなく起動できるという点を除けば。
何度も使われる仕組みを理解し、ジャミングすることができる科学者はいるだろう。しかし、既存のプログラムとは全く異なる組み方をしており、まず初見では対応できることはできない。
当然、余程のことがないかぎりは使われることはないものだ。
だが、それが使われたということは、それだけ緊急的で切羽詰まった状況であることを意味している。

「シエル！」

現に、こうして例のプログラムを使用し、血相を変えたアイリスが、シエルのもとに舞い戻ってきたのだから。
激しいノイズがかかった――――紅いデータを両腕に抱えながら。